

第1回 天ヶ瀬ダム放流調査委員会（会議報告）

本委員会における報告・確認事項は以下のとおり。

○天ヶ瀬ダム操作状況について

- ・5月8日に天ヶ瀬ダムのトンネル式放流設備から最大 $629\text{ m}^3/\text{s}$ を放流した。
- ・なお、天ヶ瀬ダムからの全放流量は、約 $800\text{ m}^3/\text{s}$ 程度であり、宇治川の流下能力 $1,500\text{ m}^3/\text{s}$ より小さく、白虹橋下流の被害は生じていない。

○今回の被災状況について

- ・天ヶ瀬ダムからの放流後に次の3箇所の被災状況が確認された。
①関電道路法面崩落 ②白虹橋付近右岸の河岸洗掘 ③祠付近の着水

○現時点で考えられる被災要因について

- ・3箇所の被災に対し、現時点で考えられる被災要因は以下のとおり。
①道路法面崩落については、「トンネル式放流設備の放流水の打ち上げが生じたこと」と想定される。
②白虹橋付近右岸の河岸洗掘については、経年的な侵食に加え、「トンネル式放流設備の放流水による洗掘」と想定される。
③祠付近の着水については、「祠前面の階段におけるトンネル式放流設備の放流水の駆け上がり」と想定される。

○トンネル式放流設備の機能確認について

- ・トンネル式放流設備の減勢工の効果が確認され、減勢工の構造に問題はないことが確認された。
- ・放流後に実施したトンネル式放流設備の施設点検において異常はなく、計画放流量に耐えられる施設であることが確認された。

○天ヶ瀬ダムからの放流方法について

- ・今回の出水におけるトンネル式放流設備の運用については、これまで $100\text{ m}^3/\text{s}$ 程度の放流実績や、事前に行われた検討結果を踏まえると、一定程度の合理性があったと判断される。
- ・しかし、今回の放流による影響に鑑み、コンジットゲートとトンネル式放流設備の適切な放流方法を検証していくことが必要である。
- ・また、本復旧工事が完了するまでの放流方法は、コンジットゲートからの放流を優先する。次に、コンジットゲートからの放流量では必要な放流量を確保できない場合に、トンネル式放流設備から放流することが望ましい。
- ・今回の放流により影響のあった区間について、トンネル式放流設備使用時の水位や流況などを継続的にモニタリングしていくことが重要である。

○第2回委員会について

- ・第2回委員会は7月を予定し、「被災原因の究明」「対策工事の選定」「放流方法の検証」について更に議論を進める。

以上